

JGR
LEVEL D

「おまじなさん、ぼくの魔女」

まじな



とよつなほくの魔女
まじよ

登場人物：
とうじょうじんぶつ

野崎竜彦・会社員
のさきたつひこ かいしゃいん
32歳

野崎保子・竜彦の母
のさきやすこ たつひこはは
58歳

萱島ゆう子・7歳・魔女？
かやしま ゆうこ さいまじよ
萱島千絵・ゆう子の母
かやしま ちえ こはは

萱島登美子・千絵の母
かやしま とみこ ちえはは
萱嶋将之介・千絵の父
かやしまさのすけ ちえちち

60歳くらい
60さいくらい

原作
げんさく 久米
くめ

書き換え
かきかえ 宮崎
みやざき

絵
え ハン・レヨン
久米 梓
くめ せき
宮崎 妙子
みやざき たえこ

萱島源之丞・千絵の弟、ゆう子のおじ

キヤサリン・萱島源之丞の妻、26歳

部長・萱彦の会社の人

藤沢ゆかり・萱彦が結婚したい人

場所・日本(北海道・九州・成田空港)

アメリカ(オレゴン)

(1)

男の人と女の子は親子だろうか？

女の子のお母さんはどこにいるのだろうか？

北海道の5月。日曜日の夕方。夕方の赤い空の下を車が走っている。赤い車も

黒い車も白い車も走っている。

白い車を運転しているのは野崎萱彦、32歳。青いTシャツにジーンズをはいている。

萱彦の隣には、萱島ゆう子が座っている。ゆう子は、目が大きく、色の白いかわい7歳

の女の子だ。

「ねえ、おじさん」とゆう子は運転している萱彦に話し掛ける。「私のお母さんと結婚し

たい？」

「うん。」

「ゆうちゃんのお母さんが好きだから」

「そう・・・じゃ、私は邪魔ね」

「邪魔？邪魔じゃないよ。ゆうちゃんのようなかわい子供がほくの子供になってくれたら

うれしいな。どうして邪魔だと思っの？」

ゆう子は竜彦の質問に答えない。

「おじさん、おじさんはお金持ち？」

「いや、金持ちじゃない。でも、一生懸命働いてゆうちゃんとお母さんを幸せにするよ。」

「お母さんも私も今幸せよ。おじさんはお金持ちじゃない。じゃ、お母さんは考え

なければいけない。」

「なにを考えるんだ？」

「おじさんはお金持ちじゃない・・・から、お

金がほしい。だから、お母さんと私は保険

をかける。そして、保険のお金をもらったために

私とお母さんを殺すかもしれないでしょ？」

竜彦は驚いてかわいい顔のゆう子を見た。

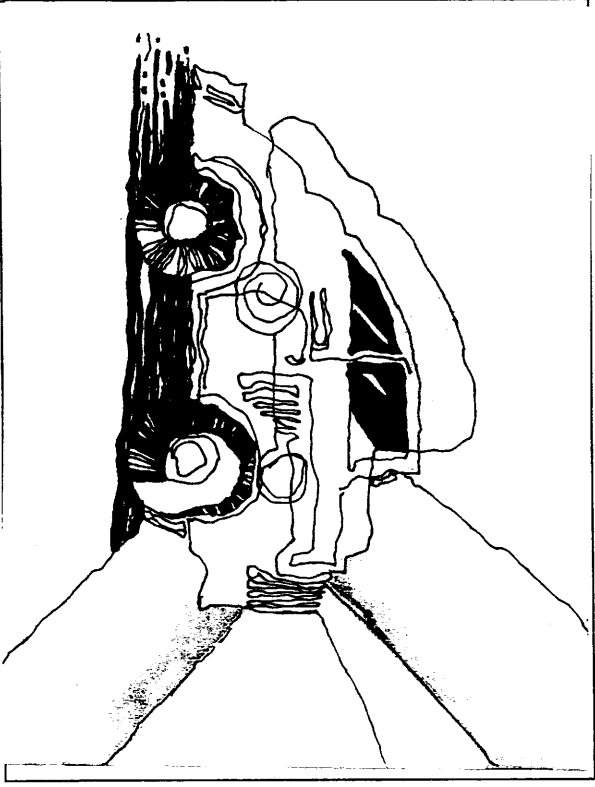
「おじさん！前を見て運転して！あぶない！」

竜彦は前を見て、言った。

「君は、おじさんがそんなことをすると思っ

てるの？おじさんは保険の金がほしいから、保

険金のためにお母さんと結婚する。結婚し



「お母さんとゆう子ちゃんに保険をかける。二人を殺す。保険金をもらうために。」

「そんな人がいたでしょう。テレビのニュースで見ました。」

「ああ、ひどい人がいたね。でも、君は、おじさんとその人が同じだと思ってるの？」

ゆう子は答えない。何か考えているようだ。

「おじさん」とゆう子は言った。「お母さんは何と言っているの？お母さんもおじさんと

結婚したいと言っている？」

「いや、お母さんはまだ迷っているようだ。お母さんは心配なんだよ。ゆう子ちゃんかぼく

を好きかどうか、お母さんは心配している。だから、結婚するかしないか、迷っているん

だ。」

「そう・・・お母さんは迷っている・・・もしわたしが、お母さんの結婚はいやだと言っ

たら？」

「そうしたら、お母さんは結婚しないよ。」

「じゃ、おじさんはどうする？私を殺す？私がいなかったら、お母さんは迷わない。お母

さんが迷わなかったら、おじさんはお母さんと結婚できる。だから私は邪魔、邪魔な私

を殺す？」

「何を言ってるんだ。ゆう子ちゃん、お母さんの大切な大切な子供だよ。」

ゆう子は何も言わなかった。車の中は静かになった。

「おじさん」とゆう子はまた話しかけた。「お母さんに電話したらいいよ。ゆう子を返して

ほしいか？ゆう子を返してほしかったら、ぼくと結婚しろ。」

結婚しなかったら、ゆう子を返さないとはいえよ。」

「いいんだよ、結婚できなくても。無理ならしかなかったら？」

「えーじや、おじさんはお母さんを愛していないの？」

(いやな子供だな。子供がいると結婚はむずかしい)と竜彦は心の中で思った。

「おじさん」とゆう子はまた口を開いた。「お母さんと結婚して赤ちゃんが生まれたら、私が邪魔になるでしょう？赤ちゃんがかわいいから。」

(7歳の子供が何を考えているのだろうか？) 竜彦はこわくなった。

(こんなにかわいい顔をしているのに、頭の中で何を考えているのかわからない。)

運転しながら、竜彦は思った。(この子を育てた千絵さんを、ぼくはよく知っているのだから)

「うか？千絵さんと結婚して、ぼくたちはいい家族になれるのだろうか？」

これまで、ゆう子の母・千絵と結婚したいと思っていたけれど、今、千絵との結婚を迷い始めた。

ね。まだ行こうね。」

あたりは暗くなり、走る車はみんなライトをつけている。竜彦の車もライトをつけて走っている。車の中で、ゆう子は寝ている。竜彦の車は、小さい家が並ぶ住宅街に入ってきた。そして、小さい庭のある家の前で止まった。竜彦はゆう子を起こし、「さあ家に着いたよ。」と言った。ゆう子は目を開けた。「どうもありがどう、おじさん。楽しかったね。まだ行こうね。」

あたりは暗くなり、走る車はみんなライトをつけている。竜彦の車もライトをつけて走っている。車の中で、ゆう子は寝ている。竜彦の車は、小さい家が並ぶ住宅街に入ってきた。そして、小さい庭のある家の前で止まった。竜彦はゆう子を起こし、「さあ家に着いたよ。」と言った。ゆう子は目を開けた。「どうもありがどう、おじさん。楽しかったね。まだ行こうね。」

「いや、もう行かない。さ、車を降りて家に入りなさい。」

「おじさんは？お母さんに挨拶しないの？『こんばんは』と言わないの？」

「言わないよ。もう遅いから。はやく降りて家に入りなさい。ここで見ているから。」

「でも、おじさん。」とゆう子が言った。「私が家に入ったら、悪い人がナイフを持って

お母さんに『金を出せ』と言っているかもしれないわ。そうしたら、おじさん、どうする？」

お母さんに挨拶しなければいけないわ。『だいたい、今、帰ってききました。』と言わなければ

いけないわ。」

「わかった、わかった。挨拶しよう。『帰ってききました』と言おう。今夜が最後かもしれない

から。」

童彦は車を降りて、小さいゆう子の手をとった。

(小さくてやわらかい手だな。) 童彦の心が優しくなった。

家のドアが開き、中からゆう子の母、千絵が出てきた。ゆう子とよく似た美しい顔、長い

髪。まだ2歳か3歳に見える。「だいたい」とゆう子は元気に言った。

「今日は本当にありがとうございます。おかげさまで仕事も全部終わりました。私も

一緒に行きかけた。」と千絵は童彦に言った。そして、ゆう子を見た。「ゆう子、楽

しかった？おじさんと一緒によかったね。」

童彦は千絵に挨拶をして、車に乗った。ゆう子が「さよなら。おじさん。」と言いな

から手を振った。

(2)

夜、千絵が病気になるって病院へ行った。千絵はじつなるのだから？

小さいゆう子はひとりで大丈夫だろうか？

助けてくれる人はいるだろうか？

三日後の午前二時、竜彦のアパートの電話が鳴っている。竜彦は、ベッドで寝ている。電話

は鳴り続けている。竜彦は目をさました。「もしもし」電話の向こうで、ゆう子が大きい声で

言った。「おじさん！お母さんが病気の。助けて。」

「お母さんが病気の？ それなら、お祖母ちゃんかおばさんに電話をしろよ。今、午前二時だ

よー」と竜彦は怒って言った。

「お祖母ちゃんはずっと遠くにいるの。九州にいるの。」

「じゃ、おばさんに電話しろよ。」

「おばさんはいないの。おじさん、助けて。お母さんが死にそうなの。」電話の向こうのゆう子

が泣いている。

「いか？すぐ行くから。」

竜彦は（仕方ないなあ）と言いつつ、ベッドから出た。「じゃ、救急車を呼べ。119だ。

竜彦はゆう子の子の家に着いた。救急車が家の前に止まっていて、ゆう子が車のそばに

いた。ゆう子は黒いかばんを大切に持っている。「おじさん、来てくれてありがとうございます。」

「そのかばんは何？」

「これ？お母さんがいつも言っていたの。大切なものが入っているから、何かあったら持つ

ていきなさいって。」

「ご親戚の方ですか？」と救急車の人が竜彦にきいた。

「いえ。この家の近くに住んでいます。」

「あ、そうですか。病気の人は救急車の中です。急いでください。この子供といっし

よに救急車に乗って下さい。いっしょに病院へ行ってください。」

救急車が病院に着いた。病院から
3, 4人の看護婦が出てきて、千絵を手術室
へ運んだ。竜彦とゆう子も手術室へ行き、
部屋前の椅子に座った。二人は心配そうに
手術室のドアを見ている。竜彦はゆう子に
小さい声で言った。「お母さんはどうしたの?」
「頭が痛い、痛いと言ったの。それでお
じさんに電話したの。」



「親戚の人に来てもらわなければならぬ。近くにいる人はだれ?」

「おばあちゃん」

「おばあちゃんは九州だろ?」

「そう、九州よ」

「ほかにいないのか?」

「お母さんの弟がいる」

「じゃ、その人に電話しなければ、どこにいるの?」

「アメリカ」

「えっ? アメリカ? アメリカのどこ?」

「オレゴン」

「じゃ、すぐ来られないじゃないか。お父さんの親戚は?」

「お父さんの親戚? 知らない」

「じゃ、しかなない。おばあちゃんに電話しよう。電話番号がわかるか?」

竜彦は携帯電話をポケットから出した。ゆう子はかばんの中を探して小さい入札を見つけた。

「あつた。おばあちゃん電話番号。」

竜彦は茶タンを押して、ゆう子に携帯電話を渡した。

「もしもし、おばあちゃん。私、北海道のゆう子です。おばあちゃん寝ていた？」

なさい。あのね、お母さんが今、入院したの。ちよつとおばあさんに代わります。」

「あ、初めまして。野崎と申します。私はゆう子ちゃんの家の方に住んでいますが、千絵さんが救急車で運ばれて、入院されたんです。はい、はい、そうです。それで、すぐに手術をしなければならぬそうです。できるだけ早く北海道に来ていただけますか？ゆう子ちゃん一人で大変ですから。」

電話の向こうの人が言った。「お世話になります。でも、私も今ちよつと大変で、北海道

へ行かないんです。もう少し、二人のことをお願いできませんでしょうか？」

電話を切つて、竜彦は入院のための書類を書き始めた。書類を隣から見ていたゆう

子がきいた。「おじさんの名前は竜彦？」

「そうだよ。い名前だろう？でも、本当に親戚の人はいないの？」

「うん、いない。だから、お母さんにはおじさんがとても大切だったの。おじさんが『お母さ

んと結婚しない』と言つたでしょう。お母さんは『悲しい、悲しい』と言つて毎晩、泣き

ながらお酒を飲んでたの。ね、おじさん、お母さんの手術が終わるまでここにいっしよ

にいて。」

竜彦がやさしくなると、ゆう子は安心して目を閉じた。

(3)

竜彦とゆう子と千絵は、いつ、どこで知り合ったのだろうか？

安心して寝ているゆう子の隣で、竜彦は思ひ出していた。

——3ヶ月前の日曜日だった。

千絵がカーブを押しながらスーパーの中を歩いている。美しい千絵の隣には、かわいいゆう子がいる。二人は楽しそうに話しながら食べ物を選んでカートに入れている。二人はレジでお金を払い、品物を袋に入れ始めた。

「あらあら、こんなになくさん買ってしまった。重くて持って帰れないわ。困ったわね。どうしよう?」と千絵が言った。

「大丈夫。私が持つから。うわ、重い。二人は幸せそうに大きい声で笑った。

竜彦は、ゆう子の隣で牛乳や卵を袋に入れていたが、楽しそうに二人の話の聞いていつしよに笑ってしまった。

かわいいゆう子が竜彦の顔を見てまた笑った。

ぼくの車に乗ったらいいよ。家まで送ってあげよう。」

「うわ、嬉しい。お母さん、よかったね。」

あの日から、週末はいつも三人でドライブした。いつも三人だった。——

(三人だったから、千絵さんと二人だけで話したことはなかったなあ。)と

ゆう子の寝顔を見ながら竜彦は思った。

(4)

千絵のお母さん・ゆう子のおばあさんは病院へ来ることができたらどうか?
千絵の家族は、どんな人たちだろうか?

手術室のドアが開いた。

「先生、手術は・・・」竜彦は立ち上がりてきていた。ゆう子はよく寝ている。「終わりました。手術はうまくいきました。が、まだ安心してできません。血がたくさん出たんです。私

「できることは全部しました。あとは、病人が頑張るだけです。」

「どうもありがとうございます。」

竜彦は頭を下げた。

手術室のドアが大きく開いて、千絵を乗せたベッドが、4人の看護婦に押されて出てき

た。ゆう子も目をさまし、竜彦といっしょに千絵を見た。千絵は白い包帯で頭を巻かれ、

目を閉じている。「お母さん」とゆう子は心配そうに、包帯で頭を巻かれた千絵に呼びか

けた。

「大丈夫よ。お母さんはよく頑張ったわ。今、薬で寝ているの。もう少し待ってね。お

母さん、もうすぐ目をさますから。」と看護婦が言った。それから、竜彦を見て、「病人を
これから病室へ運びます。2、3日はだれがこの病人のそばにいてください。」と言っ
た。

「はい、だれか親戚の者が来ると思いますが、もう一度電話をしてみます。」

千絵が病室に入ったのを見て、竜彦はポケットから携帯電話を出した。ゆう子に電話

番号を教えてもらい、竜彦はボタンを押した。

「もしもし、北海道の野崎ですが、おはようございます。今、手術が終わりました。手術

はうまくいったそうです。でも、血がたくさん出たそうです。それで、まだ安心してきないそう

です。それで、2、3日は親戚の人にそばにいてほしいそうです。」竜彦が言うと、電話の

向こうでゆう子の祖母が言った。

「本当に、本当に有難うございます。すぐに北海道に行きたいのですが、私の夫が、

あ、千絵の父ですが、病気で私が世話をしなければなりません。毎日の世話が大変な

んです。私も体が弱くて……。それで、

千絵に九州に帰ってきてほしいと思つて

いたのです。」

「はあ……。それは大変ですね。千絵さんの

兄弟は？ 弟さんがいらつしやるのでしょ

う？」

「それが、アメリカにいて、帰ってくるの

はちよつと……。」

「遠くて大変でしょうけれど、千絵さんが死

ぬかもしれないのですよ。お帰りになれないで

しょうか？ 電話をなさいましたか？」



「はい、すぐに電話をしたのですが、息子は、千絵の弟ですが、二日前に事故にあつて

入院しているらしいのです。手術をしたばかりだったので、息子は帰ることができません。

息子の妻がアメリカ人で、日本語がよくわからないんです。ですから、アメリカ人の妻が

北海道に行つても、なにもできないでしょう……。本当にすみません。」

「それは大変ですね。でも、私も困ります。ほかに親戚の方はいらつしやいませんか？」

「ええ、いません。私は兄弟がいません。千絵の父には、弟が二人いますが、一人

は家族みんながオーストラリアに住んでいます。もう一人はもうなくなりました。」

「はあ……。じゃ、ゆづちゃんのお父さんはどうでしょうか？ ほくほくはよく知らないのですが、

もうなくなつたのでしょうか？ 千絵さんは離婚したと聞いていますか？」

電話の向こうが静かになった。竜彦の質問に答えたくないようだった。

電話の向こうから声が聞こえた。「ゆう子の父親はなくなりました。ゆう子が生まれてすぐに

なくなつたのです。名前を一郎さんといいますが、この一郎さんのご家族は一郎さんが

千絵と結婚することに反対でした。私は、一郎さんのご家族がどういふ方たちなのか、

ぜんぜん知らないのです。」

「だけど、ゆう子ちゃんは一郎さんの子供ですから、一郎さんのご家族がゆう子ちゃん

世話をしていでもいでしょう。普通の時ではないんですから。」

「はあ・・・。本当にすみません。一郎さんのご家族が今どこにいるのかも知らないの

です。千絵は知っているかもしれないかもしれませんが、本当にすみません。今お願いできるのは、あなた

だけなのです。」

「それは、まあ、できることはしますが、ぼくは男ですし、結婚もしていませんから、女性

の千絵さんや子供のゆう子ちゃんやの世話はできませんです。」

「すみません。どうぞよろしくお願ひします。ぜんを野崎さんにお任せします。」

「いやあ、それは困るのです。責任はとれません。」

「けいこです。責任をとらなくてもけいこです。どうなつても、何も言ひません。お任せ

したんですから。」

「ぼくのことを何も知らないのに、大切な千絵さんをぼくに任せるのですか?」いえ、野崎

さんのことは千絵から聞いています。ですから、私は野崎さんを信じているのです。私た

ちにお願ひは手紙に書きますから、ご住所を教へていただけませんか?それからお電話

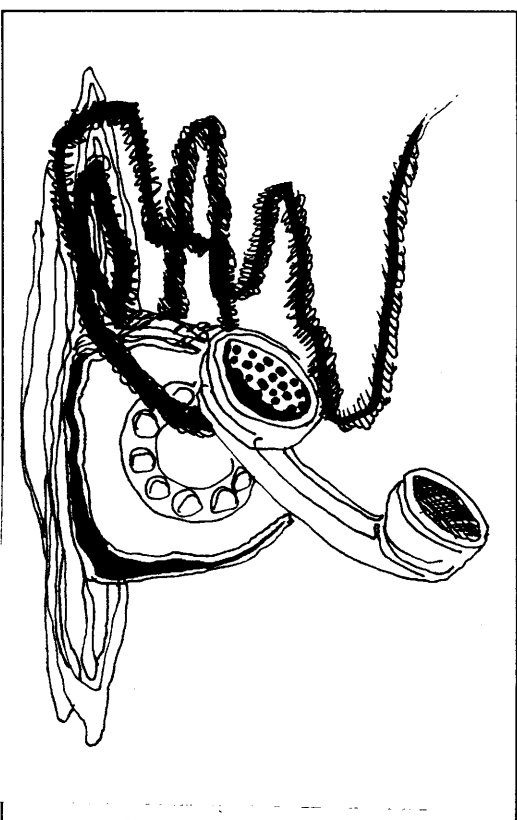
番号も。」

竜彦は、しかたがないと思ひながら、住所と電話番号を教へた。

「有難うございます。では、よろしくお願ひします。」

「あ、千絵さんはぼくのことをお母さんに話していたのですか?ぼくが千絵さんに初めて

あつたのは3ヶ月前なんです。
 「ええ、ええ、聞いています。野崎さんはいい方で
 できたら結婚したいと千絵は言っていました。でも
 子供がいるからお辞めかしらね」とも言っていました。
 「そうでしたか・・・」
 「あ、すみませんが、ゆう子に代わっていただけます
 か？ちよつと話したいことがあります。」
 「あ、はい、今、代ります。」
 竜彦は電話をゆう子に渡した。
 「もしもし、おはあちゃん、ゆう子です。はい、はい、



わかつた。おばあちゃんも元気でね。ゆう子は電話を竜彦に返した。竜彦は電話を切つ
 てポケットに入れたから言った。「ゆう子ちゃんの家族はどんな家族なんだ？どうして、みんな
 いっしょに病気になるのだから？ゆう子ちゃんのおじいちゃんか病気が、おじさんは事故で
 入院、お母さんも病院。どうしたらいいんだ？困つたなあ。ゆう子ちゃん、そのか
 ばんの中にお父さんの親戚の住所や電話番号が入っていない？それからお母さんの
 会社の電話番号。ゆう子ちゃん、今日は学校、どうする？休む？じや、学校に電話で
 しなければいけない。ほくも会社どうしようかな。仕事、忙しいんだよ、困つたな。」

(5)

千絵は自さますだろうか？

千絵の会社の人は助けに来てくれるだろうか？